

淺草彈丸衛門

第一部

臨見鮮

塩見鮮一郎（しおみ・せんいちろう）

1938年 岡山市生まれ

1963年 岡山大学文学部卒業。河出書房新社編集部を経て、現在、作家。

著 書 『黄色い国の脱出口』（田畑書店）
『告別の儀式』（田畑書店）
『巫女たちの夏』（筑摩書房）
『表現の装置』（批評社）
『言語と差別』（せきた書房）
『ハルハ河幻想』（せきた書房）
『都市社会と差別』（れんが書房新社）
『浅草弾左衛門』第二部（批評社）
『浅草弾左衛門』第三部（批評社）

浅草弾左衛門 第一部 ©Shenichiro Shiomi * 0030-85061-7189

1985年 6 月25日 初版第 1 刷発行 定価3200円

1988年 1 月25日 初版第 3 刷発行

著 者 * 塩見鮮一郎

装 幀 * 貝原浩十山猫通信社

題 字 * 村山静子

発行所 * 尚批評社

東京都文京区本郷2-6-15 電話03-813-6344

印 刷 * 佛文昇堂

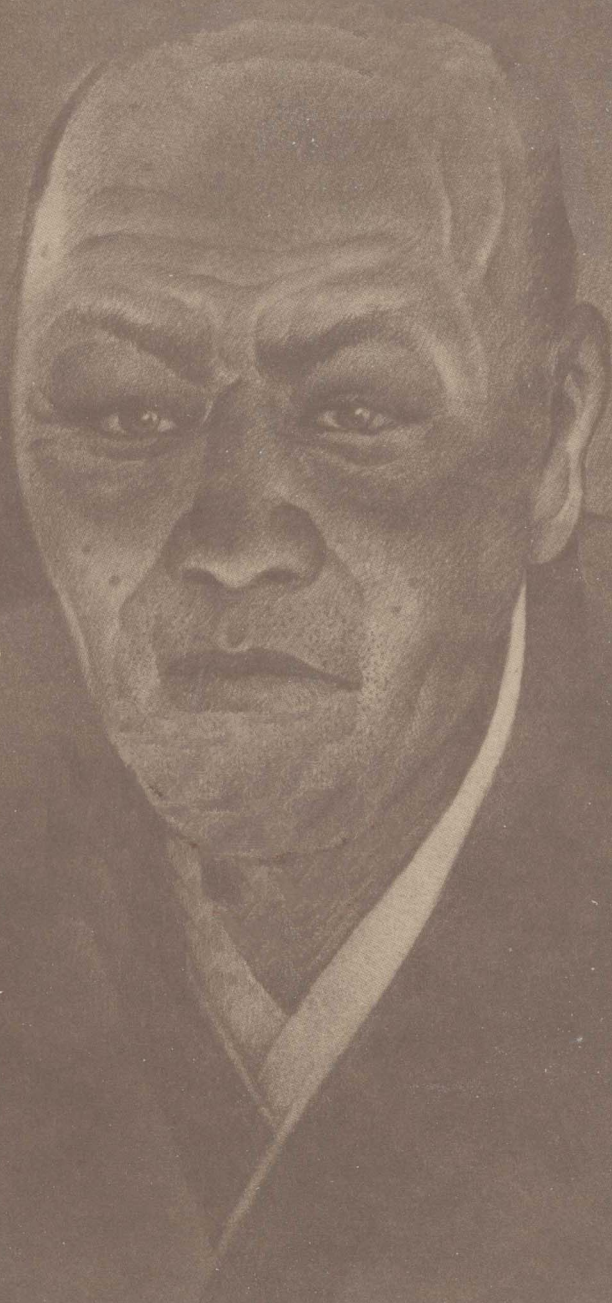
製 本 * 越後堂製本

浅草弾左衛門

第一部

塩見鮮一郎

批評社



目次

その一	小太郎出府の巻	7
その二	車善七反攻の巻	103
その三	改革津波の巻	197
その四	鼻緒騒動の巻	305

浅草弾左衛門 第一部

その
一

小太郎出府の巻

山路をくだるにつれて、丈高い杉木立のあいだに見え隠れしていた湖面がせりあがってきた。たつぷりと水をためた湖の遠い岸は、連なる峰とともに霞のうちにとけこんでいたが、近くは波もないまま鏡となつて春三月の光をまぶしく放つ。

点々と浮かぶ釣船は、目のおもてに飛びこんだ羽虫のむれのように、あわててまばたきをする、涙が溢れた。足柄の箱根飛び越え行く田鶴のともしき見れば大和し念ほゆ、と万葉のころの人は歌つたが、はや望郷の思いに胸のつぶれる感があつた。十日と少しまえ、武家と見紛うほどに姿かたちを整えた丸山三右衛門が供の彦一を連れて、かの弊屋の戸口に立ったときから、いっさいは白日夢となつた。時は反復のきかぬものとなつて、ただ前へ前へと流れ、大津の宿は四日市に至れば回想の宿となり、四日市の宿は浜松に至れば記憶のうちにしかなかった。

男子として郷関を出てきたからには、生を受けて十七年を送つたかの弊屋もまた、ひと夜をすごした宿場と同じく、二度と目にすることはかなわぬのであつた。とはいえ、時の前方には、江戸浅草の新町という耳に吹きこまれた高いひびきしもなく、彼小太郎に思い描ける具体とは過去ばかりであつた。

父の利左衛門が池田村の伯父の家から帰ってきたとき、一日じゅう歩き通しただらうに、その顔は疲れもなく、興奮のあまり赤ばんでいた。

「寒うおましたやろ」

と着物に継ぎをあてていた母のせんが立ちあがり、秉燭【油皿の一種】を取った。草鞋をあんでいた彼の手もとは急に暗くなった。

「お父、お帰りやす」

と彼はいい、掌に唾を吐きつけ薬をよじった。

せんがいつになく気を配っているのがわかった。それも、前日の朝、父が出かけるときは不機嫌もいいところであつたので。いったいせんたい、どない用なんやろ、すぐにもこい、というてよこすなんて。そんな、今日明日を急ぐ用なんてあるやろか。おまえの兄はんは、年寄役を鼻にかけ、なんでも自分の思うようにしなはる。こちらの都合なぞまるで考えんお人や、と利左衛門はこぼした。

だが、灯に照らされた父の顔は、心騒ぐほど赤ばんでいたし、お父、お帰りやす、といった小

太郎のほうを、彼が影のうちにいるにもかかわらず、まぶしそうに見た。

「お父やで、お父が帰ってきたで」

板の間のすみの煎餅蒲団に横になっていた祖父が、そばに寝ている小次郎にいった。去年の秋から祖父は急に惚けた。声に節をつけることで、どうにか言葉になる。

「おじい、小次郎を起こさんでええ」

と父はいった。はずんでいる息をおさえるように。

「あの、兄やんはどない用でござりやした？……なにかええ話でもござったんで？」
せんがいった。

「うん、ちょっと。そう急かさんと」

利左衛門は囲炉裏の横座にどつかとすわり、伏せてあつた茶碗をとった。

「はあ。それで晩ごはんは」

「豆餅をもうてきたわ。まずは熱い湯でもくれ」

いま父のいる横座に祖父が、母のいるなべ座に早く死んだ祖母がすわっている光景を、彼は一瞬、思い浮かべた。

「小太郎、おまえも食べたいんやろ」

鉄灸に豆餅を並べながら母がいった。

「ああ」

生唾がでて、喉がごとりと鳴った。

「ぎょうさん食わしてやれ。小太郎がもうたようなもんやさかい」

その父の声を聞きつけてか、部屋のみから祖父が節まわしをつけて、

「ええにおいで、ええにおいで。わしは神様に祈ったで、いつもいつも祈ったで、死ぬまでにもう一度、餅食わしてほしいいうて。ほんまやで。そやから餅が降ってきた」

といい、いつもは独りでは動こうともしないのに、脂のたまった目を光らせて這い込んできた。左の手で筵をつかんでからだを引きずる。麻痺している右腕は、死んだ青大将のように、伸びたままずるずるとついてくる。

「神様からわしがもうた餅や、といたいんか。ちがうで、おじい。餅くれはったんは、池田の助左衛門やで。おじいもびっくりせんと、よお聞けや。ほいで、助左衛門はんはな、小太郎を養子にだせ、といわはるのや」

足の指にからませた藁を引っぱっていた彼小太郎の手も、おじいの右腕のように動かなくなつた。

「なにいうてはる。兄やんの家は、男の子が三人もいやはるやないか」

と母は軽く受けた。

「兄はんのとこへじゃない。ええか、小太郎を養子にほしいといわはるんは、お江戸の弾左衛門さまなんや」

小太郎は上目に父を盗み見た。冗談にちがいないと思ひながらも、血が顔にどつとのぼった。

「なんや狐に化かされてるんとちゃうか。それとも、わしをからこうていなさるんか……」

せんは笑いかけるが、利左衛門のこわばった表情に気づいて黙った。しばらくして、動揺をおしくすように小さい顔を左右にふった。信じ難い、となおも主張しているようでもあり、いや、いやや、とすでに拒絶しているようでもあった。囲炉裏の木が爆ぜ、火の粉が舞った。

「餅、焦げてるで」

小太郎は小声でいった。齒の裏まで乾ききっていて声はかすれた。彈左衛門という昔話に出てくるような男が、暗い梁のすみから彼を見ていた。

「そやな」

父が黒ずんだ太い指で囲炉裏の餅をつまむと、祖父の顔のまえに放った。

「せやかて、なんで小太郎のことが、あんでつか、遠いお江戸にまで知られているねん」
思案していたせんが、ほつれ毛をかきあげた。目尻が吊りあがり、女狐の目になった。

「おじい、静かに食わんか。べちゃべちゃとまるで子供やないか」

父が怒鳴った。めったに声をあらげることのない父である。苛立つ感情の渦がそのまま小太郎の胸に押し寄せた。家具とてない狭い板の間の空気が息苦しく煙った。

「なあ、あんさん」

母がなだめた。

「おせん、わしも不思議やさかい、それを兄はんにいうた。ちゃんと聞いたやないか。すると、兄はんは、『なに小太郎は神童よ、去年、家^{うち}にきたときにゃ、まだ十五やいうに、どんなにむづかしい字でもすらすら読みよる。あんな子は池田にもおらん』いうて笑うてばかり、埒^{うち}があかん。

なんせ、端っから、こう、鬼の首でもとったようなえらい勢いでな。わしが口下手にもぞもぞというてると、『こんなええ話がどこにあると思うとるねん。弾左衛門さまいうたら、関八州を統領なさつとるんやで。いやいや、関八州だけではねえ、陸奥も相模も伊豆も甲斐もや。いやいや、全国のわしらの親方さまよ』とな。『兄はんよ、そんな、ごつうえらい人のとこやさかい、わしの頭もおかしゅうなったのやないか』というと、『弾左衛門さまは、そもそもは池田領の火打村の出身といい伝えられとるやろ。はっはっ、これもなにかの縁よ。なに、小太郎のことなら心配せんでええ。あの子なら勤まるさかいに。ほんま、あんな神童は二度と出てきやへん。あんだ、小太郎に腐れ田を耕さして一生を終えさす気やないやろ』とまでいわれたで」

父は焼けた餅を、彼と目があわないようにしながら、投げてよこした。義兄との会話を想起したためか、顔はふたたび赤らみ、目がうるんでいる。

「兄さんこそどうかしなはったんや。なんとまあ、神童やて、小太郎」

母のせんは助けを求める視線を囲炉裏ごしにむけてきた。三十四というのに、はや皺の刻まれている顔が泣きそうにゆがむのを、彼小太郎は見つづけることができなかった。

「あちっ、あちっ」

と掌のうえに転がせていた餅を、彼はぼんとはねあげ、口で受けとめた。しかし、口のなかは乾き、食欲も失せていた。

「はっはっ、これがなんで神童や」

せんは無理に笑い、手を顔のまえでふった。

「なあ、おせん。帰りの道すがら考えたんやが、どうもこの話、安芸【広島県】の西松村に嫁いだおまえの姉はんが一枚かんでいるのとちゃうやろか。養子のこと、うちでどう思うか、それとのう聞いてみてくれと、兄はんは頼んだのと」

「姉やんが？　なんでや」

「ほら、覚えてないんか。おまえの姉はんの嫁ぎさは長吏頭でええ家柄や。その分家が宮島ちかくの甘日市にあつて、そこからは二代にわたつて弾左衛門さまに養子をだしていなはる。そうやつたろ」

「そうでんな、そんなこと耳にしたことがあるわ。けど、なんでうちの小太郎やなければあかんのや。ようやくここまで育ててきたのに」

不意とせんは両手で顔をおおつた。嗚咽が漏れ、瘦せた肩がげしく上下した。一年まえの夏に抱瘡で死んだ童女は、まの姿も脳裡をよぎつたのかもしれない。いままた跡取りまで失いかけている。

「お母、おれ、養子になんか、どこへも行かへんで」

母の氣持を思うと胸のうちが沸騰した。餅を吞みこめないまま、よく考えもしないで彼は叫んでいた。

「そう、そうよ、おせん。な、なにもそうと決まったわけやないで。次男はおるけど、ま、まだ三つや。それに、こんな、いつまた飢饉になるかしれへんこんなときに、うちの働き手をとられて、どうやってやっていける。兄はんにもちゃんというてきたわ」